



巻 頭 言

農 薬 は い ま

(財)日本植物調節剤研究協会 常務理事 小沢 啓男

ひと昔とはいえませんが、昔は農家と非農家の間柄はそれほど悪い関係だったとは思えません。生産する人に対し、消費する人達は感謝の気持ちが充分にありました。

蓑着て、笠着て、鍬もって、お百姓さんご苦労さん。という童謡歌手の歌声が鮮明に耳に甦ります。

かつて、米一粒、さつまいも一本が貴重なものでした。といってもこの飽食の時代に今更にいわれかねませんが、当時の農家は農業生産に喜びと誇りが持ち得ました。ところがどうでしょう。いまは豊作はあまり歓迎されず、農薬使用の便利さが罪惡の如くいわれます。そのうえ、儲けた外貨をすべて農業が喰い潰すという学者さえいる仕末です。これでは農家は生産意欲を削がれてしまいますし、一部の煽動で非農家サイドと農家が仇敵のような関係になるのも惨めなことです。農家は逃げ場がありません。簡単にデューダできる程農民は身も、心も軽くはないのです。

農業生産物の消費者、いま盛んに社会を賑わしている人達は、消費者の代表振っている一部の人だと思うのですが、この特定の人達にとって、農家が農薬を便利に使用することが、どうやら面白くないようです。

古くから、精農は草を見ずして草を取ると言い伝えられ、農業は雑草との闘いであるともいわれます。いかにして、雑草との斗いに勝つか、農民は一途に鍬を振り、自らの手を熊手にして、田畑に這いつくばってきました。除草剤が開発

され、これの使用で簡単に防除できるようになり、農民は労働的にも、健康の面からも著しく恩恵を得ることになったのです。

ところが、化学物質の使用は危険なものと決めつける人達にとっては、この化学的防除法は許せないことになってしまうのでしょうか。水田で四つん這いになって、三番草、四番草を手取りしたあの辛さ、苦しさを再び農民に課したくはないのです。そのために、私達は更に安全評価を高いところにして開発活動を進めているのです。今迄は、などとあげ足取りは止めて、努力の過程も評価してほしいものです。出来ること、出来ないこと、やってはいけないこと、やらねばならないこと、これらのけじめが必要かと思ひます。

ところで、情報という言葉、よくインフォメーションと訳しますが、インフォメーションとは単なるデータを意味し、真の情報はインテリジェンスであると、先にある本で目にしました。世は正に、情報化時代といわれ、情報が飛び交っています。このような時こそ、豊富なインフォメーションの中から真の情報を得て、正しく対処すべきでしょう。農薬に関してもマス・メディアを通して沢山の資料が提供されはじめています。これを鵜呑みにして、単なるデータに振りまわされないようお願いしたいところで

す。研究を重ね、更に数倍の努力をすすめている農薬に環境保全の名の下に、感情に走った愚かな誇りだけはやめてほしいと思ひます。